



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ワイマール共和制期における「不気味なもの」の形成
Author(s)	宮嶋, 俊一; Miyajima, Shunichi
Citation	北海道大学文学研究院紀要, 175, 25 (左) -33 (左)
Issue Date	2025-03-28
DOI	https://doi.org/10.14943/bfhhs.175.l25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94350
Type	departmental bulletin paper
File Information	04_175_Miyajima.pdf



ワイマール共和制期における 「不気味なもの」の形成

宮 嶋 俊 一

1. はじめに

宗教と科学は対立する、という言説が一般に流布している。本稿の背景には、この宗教と科学の対立、あるいはそうした言説の形成過程の解明という問題意識がある。この「対立」は、宗教研究にも大きな影響を与え続けた。「宗教は科学と対立的であるゆえ科学的研究に馴染まない」、「科学者に宗教は理解できない」、といった主張を目にすることもある。そして、この「対立」は、今日に至るまで存在する科学的／現象学的宗教研究という対立構図としても維持されていると考えられる¹。

宗教と科学が対立するという見方の根幹には、宗教の本質が「非合理的なもの」である（対して科学は合理的である）という考え方があると思われる。この考えは古くから存在してきたが、20世紀前半、特にワイマール共和制期ドイツの宗教学者・神学者であるルドルフ・オットーやフリードリヒ・ハイラーらにより「学問」的にも堅固なものとされ、その後に継承された。「非合理的なもの」は当時の宗教において本質的とされただけでなく、それを探究する宗教学の方法論にも大きな影響を与えたのである。

そのような「非合理的なもの」の形成過程とその影響について先行研究を踏まえつつ、当時の時代・社会状況や学問状況を鑑み明らかにすることに筆者の関心はあるが、本稿では、オットーによって「非合理的なもの」の一要素とされた「不気味なもの」に着目してみたい。なぜなら、この「不気味な

もの」がワイマール共和制期において、宗教学のみならず、さまざまな精神文化運動や芸術運動においても重要な意味を持ったと考えられるからである。本稿ではその一様相を明らかにしていく。

2. オットーとフロイト

ルドルフ・オットーが『聖なるもの』(1917)において、宗教における非合理的な要素をヌミノーズと名付け、その内実を分析したことは夙に知られている²。ヌミノーズとは、「聖なる」という概念から倫理的・合理的な要素を取り除いた余剰部分であり、オットーによって宗教の本質（それなくしては宗教が宗教ではなくなるもの）とされる。オットーは同書において、「被造物感」、「畏るべき神秘」、「魅惑するもの」など、その要素をいくつか挙げているが、本稿では、その一つとして「不気味なもの」が挙げられていることに注目したい。

オットーはヌミノーズには「不気味なもの (das Ungeheuer, das Unheimliche)」という要素があり、この要素が展開することで「恐ろしい」「畏るべき」「いやな」「堂々として人目を引く」「力強い」「奇妙な」もの、あるいは「驚異的」「驚嘆すべき」「恐がらせるとともに魅惑する」「神的」「デーモンの」および「エネルギー的な」などといったものにもなると述べ、ソフォクレスの『アンティゴネー』の合唱の歌詞を引用する。そして、ギリシア語の *deinos* に近いドイツ語として不気味な (*ungeheure*) を挙げる。さらに、*ungeheure* の語が、今日では規模や性質の上で途方もなく大きいものを意味するが、それは後年に付け加えられた、合理的な解釈であり、元々はそれを思うと「気持ちが悪くなる」もの、気味が悪いもの、つまりヌミノーズ的なものと言う。そして、ゲーテの『ファウスト』における用法が説明される³。ここで確認しておきたいのは、「不気味なもの」として説明される *unheimlich* や *ungeheure* が人間にとって根源的な感情であること、さらに文学作品の分析を通じてそれが検証されていることである。

オットーが『聖なるもの』を出版した2年後、フロイトも「不気味なもの

(Das Unheimliche)」という論文を発表する。この論文がもともといつ頃書かれたのかは明らかではないが、1919年に雑誌『イマーゴ』に発表された後、1924年に刊行された『詩と芸術の作品の精神分析的研究』に採録された⁴。

この論文においてフロイトはまず、不気味なものを「驚愕させるもの、不安や恐怖を引き起こすものの一つ」とした上で、ただし「この単語はいつも厳密に定義された意味で用いられるわけではない」ため、「たいていの場合、まさにその不安を引き起こすものと概して一致する」のだが、それでもある概念を表す特別の語が用いられている以上は、その使用を正当化する独特の核となる何かが存在するはずであり、その「不気味なもの」を不気味なものたらしめる共通の核心を明らかにすることを企図する。

そして心理学者E・イェンチュの先行研究を踏まえながら、(1)「不気味な」という単語の中にどのような意味が沈殿してきたかを明らかにする方法と、(2)人間、事物、感覚印象、体験、状況の何であれ、われわれの内に不気味なものの感情を呼び起こす事例を描え集め、それらのすべてに共通するものから不気味なものの隠された性質を推し量る方法、という二つの方法を示す。これらはいわば、演繹的／帰納的方法である。そして、結論として、どちらの道も同じ結論、すなわち「不気味なものとは、ある種の驚愕をもたらすものののだが、それは旧知のもの、とうの昔から馴染みのものに起因する」という結論に達する⁵。

前者のアプローチに関しては unheimlich という単語が、heimlich, heimisch (我が家の), vertraut (馴染みの) の反対語であり、そこから「何かあるものが驚愕させるのは、まさに知られておらず馴染みが無いからこそだ」という結論が予想されるが、馴染みのないものすべてが驚愕させるわけではなく、それを「不気味なもの」とする何かが付加される必要があり、フロイトは語義史や用例を辿りつつ上述の結論に達するのである。また後者のアプローチとしてホフマンの『砂男』などの文学作品が分析の対象となり、「同じ事態の反復が不気味な感情を引き起こす」といった興味深い指摘もなされる。

ここで、オットーとフロイトを比較してみよう。オットーもフロイトも、語義や用例、および文学作品の分析を通じて、「不気味なもの」の内実を明ら

かにしようと試みた。そして、両者ともに「不気味なもの」をさまざまな感情を引き起こすいわば「源泉」と捉えていることも同様である。

ただし、両者には違いもある。オットーは、(直接、「不気味なもの」について言及している箇所ではないが、) 神秘の要素について論じた箇所で、「驚くべき」ものが、「全く他のもの (das Ganz Andere)」であると述べている。すなわちそれは、よそよそしく見慣れないものであり、日常的なものや理解されるものおよび親しんでいるもの、したがって「気のおけないもの」一般の世界からは逸脱しているものであり、それとは対立するもので、それゆえに身体がこわばるような戦慄で心情をみたまふものであるとする⁶。それに対して、フロイトは既述の通り「不気味なものとは、ある種の驚愕をもたらすものなのだが、それは旧知のもの、とうの昔から馴染みのものに起因する」と、正反対とも言える結論を示すのである。

どちらの主張が「正しい」かを論じることには、あまり意味はないだろう。なぜなら「不気味なもの」が置かれている文脈が異なると考えられるからだ。フロイトにとっての「不気味なもの」とは、「馴染みのもの」が抑圧され、日常的な意識からは遠ざけられたものと考えられる。つまり「不気味なもの」とは、抑圧されていたものの回帰であり、それゆえに両価的で、人を恐れさせるものとなる。というのも、抑圧されたものが回帰する際に、それはいわば「偽装」し、ゆがめられた姿として現れるからである。それゆえに、「不気味なもの」は日常的・家庭的 (heimisch) なものと非日常的で奇妙で家庭的ではない (unheimlich) ものとの間に生じる緊張を具体化したもの、例えばドッペルゲンガーや幽霊のようなものとなる⁷。このように、フロイトの「不気味なもの」は彼の精神分析の理論と密接に結びついている。他方、オットーは「不気味なもの」だけを単独で取り上げたわけではなく、あくまで宗教における非合理的な要素、すなわちヌミノーズの一要素としてそれを取り上げたに過ぎない。オットーの関心はあくまで宗教体験がもたらす宗教的感情の内実であり、その両価的な性質を説明するための一側面として「不気味なもの」が扱われている。ただし、そうした違いがあったとしても、両者が人間の感情の根源的な要素として「不気味なもの」に着目していることは興味深い。

3. ハイラーの「非合理」論

ここまでオットーとフロイトの「不気味なもの」論を取り上げたが、オットー同様に宗教の非合理性を強調した、同時代の宗教学者であるハイラーを参照してみたい。祈りを宗教の本質的要素としたハイラーは「祈りには、宗教のかたくなな非合理性がもっとも明瞭に現れる」と述べ⁸、オットーの『聖なるもの』を引用しつつ、祈りを媒介として宗教の非合理性を説いた。だが、オットー（やフロイト）のように、「不気味なもの」に注目した痕跡は見られない。例えば「祈りのきっかけと動機」の中の困苦を説明する際、その内実として「畏れ、驚き、不安」などを挙げる⁹。また、「聖なるものへの畏怖」として、オットーの『聖なるもの』のヌミノーズの説明を引用する¹⁰。ここでハイラーは祈りの動機には、苦悩や感謝と並んで聖なるものを前にした畏敬の念がある」とし、その要素として「神聖なもの（ヌーメン的なもの）」と「魅するもの」を挙げるのだが、「不気味なもの」は挙げていない。また、「このような畏怖は、不安におびえた恐れや恍惚とした感服のような、宗教に特有の原感情、ないしは原情動である」とし、それが神秘的ですばらしい「力」、魔法のような「力」、「マナ」や「タブー」といった表象を生み出す」と述べ、「畏怖」の感情が両価的であり、「恐れと希望、不安と確信、恐怖と歓喜、震えと驚嘆などを包み込むような情動の混合物」「未分化の情動」といった説明はするのだが、そこに「不気味なもの」は含まれてない¹¹。要するに「畏れ」についての言及はあるが、「不気味なもの」についての言及は見られない。ハイラーの全著作を詳細に検討したわけではないが、少なくとも目立つ形での「不気味なもの」についての言及は見られないのである。

4. 「不気味なもの」の継承

ハイラーとオットーはいずれも宗教の非合理性を強調し、前者は後者の宗教論を継承したと言えるが、他方「不気味なもの」という要素を継承・展開

させたとは言いがたい。だがそれは（直接の影響関係の有無を指摘することはできないにせよ）同時代のフロイトには共有されていた。ではその後この「不気味なもの」はワイマール共和制期ドイツにおいてどのように継承・展開していったのだろうか。

その様態を当時の芸術運動に見ることもできるだろう。第一次世界大戦後、1920年代に起こったノイエザッハリッヒカイト（新即物主義）の運動がそれである¹²。この芸術運動の起源としては、1925年、当時マンハイム市立美術館館長であったグスタフ・フリードリヒ・ハルトラウブが文学で用いられていた新即物主義の概念を絵画に転用して開催した展覧会『ノイエザッハリッヒカイト（新即物主義）——表現主義以降のドイツを代表する芸術』がその嚆矢とされ、オットー・ディックス、ゲオルゲ・グロースらがこの潮流に棹さしていた代表的画家たちである。表現主義の流れに位置するこの運動は、現実（の醜さ）をありのままに描いたとされ、それゆえにノイエヘスリッヒカイト（新醜悪主義）と揶揄されたりもした¹³が、それはまさに「不気味なもの」の現れであった。

まとめ

本稿では、「非合理的なもの」の一樣相としての「不気味なもの」に着目し、ワイマール共和政期ドイツにおけるその形成と展開のごく一部を指摘した。共にワイマール共和制期に活動していたオットーとフロイトによって「不気味なもの」は注目されたが、その分析結果は正反対とも言えるものであった。だが、それと同時に、それは両者においてさまざまな感情の源泉とされた。ただし、非合理性を強調するすべての宗教学者がそれに着目したわけではなく、オットーと多くを共有していたハイラーにとって、それは重要とは言えなかった。その一方、「不気味なもの」は同時代において、さらなる広がりや展開を見せていたと考えられるのだが、その詳細な解明はこれからの課題としたい。

* 本稿は、日本宗教学会第 83 回学術大会での発表「宗教学における「非合理的なもの」の形成」（9 月 14 日）に基づく。なお、本研究は JSPS 科研費 JP21K00064, JP20H01188, JP20K20499 の助成を受けたものである。

注

- 1 藤原聖子「宗教「学」をめぐる論争の変遷と現在：国際学会のアイデンティティ・ポリティックス」『東京大学宗教学年報』第 40 号, pp 1-22, 2023, および Ambasciano, Leonardo, *An Unnatural History of Religions-Academia, Post-truth and the Quest for Scientific Knowledge*, Bloomsbury Academic, 2018 を参照。
- 2 オットーについては、澤井義次『ルドルフ・オットー 宗教学の原点』慶應義塾大学出版会, 2019 年, 藁科智恵『ルドルフ・オットー『聖なるもの』と世紀転換期ドイツ—信仰と近代学問の相克—』晃洋書房, 2022 年などを参照。
- 3 Otto, Rudolf, *Das Heilige: über das irrationale in der Idee des Göttlichen und sein Verhältnis zum Rationalen*, Beck 1979 (¹1917), S. 53-55. (オットー, ルドルフ (華園聰麿訳)『聖なるもの』創元社, 2005 年, 92-96 頁)。
- 4 須藤訓任「解題 書誌事項 「不気味なもの」」『フロイト全集 17』岩波書店, 2006 年, 412 頁。
- 5 Freud, Sigm., *Das Unheimliche, Gesammelt Werke in Einzelbänden (Bd. 12), Werke aus den Jahren 1917-1920* S. Fischer Verlag, 1967 (6. Aufl), S. 229-231 (フロイト, ジークムント (藤野寛訳)「不気味なもの」『フロイト全集 17』岩波書店, 2006, 1-5 頁)。
- 6 Otto, a.a.O., S. 28-29 (オットー, 前掲書, 53-54 頁)。
- 7 Biles, Jeremy, "Out of This World: The Materiality of the Beyond," pp. 137-140 in Morgan, David (ed.), *Religion and Material Culture - The Matter of Belief*, Routledge, 2010.
- 8 ハイラー, フリードリヒ (深澤英隆監修, 丸山空大, 宮嶋俊一訳)『祈り』国書刊行会, 2018, 529 頁。
- 9 ハイラー, 前掲書, 55 頁。
- 10 ハイラー, 前掲書, 61 頁。
- 11 ハイラー, 前掲書, 61-62 頁。
- 12 Buderer, Hans-Jurgen, *Neue Sachlichkeit: Bilder Auf Der Suche Nach Der Wirklichkeit Figurative Malerei Der Zwanziger Jahre*, Prestel, 1994. なお, 精神分析の芸術への影響としては, シュールレアリズムが有名である。本稿では, こうした影響関係を論じるのではなく, あくまで同時代的な現象としてノイエザッハリッヒカイト

運動を取り上げている。

- 13 生松敬三『二十世紀思想渉猟』青土社、1990年、102-103頁。なお、この表現は哲学者のハンス・ゲオルグ・ガダマーが、1920年、シェーラーのマルブルクでの講演を聞きに訪れた際、エルンスト・ローベルト・クルチウスの紹介で（シェーラーに）会った際の印象として語られている。「《デモニッシュな印象》なんという形相だろう！ケルン大学の教授室に入ったことのある者なら、そこに掛かっているオットー・ディックス画くところの肖像を知っている。新醜悪主義（die neue Häßlichkeit）の画法によるなんともすばらしい記録だ。そこにはなんの誇張もなかった。むきだしの真実が描かれてあった。両肩の間に沈みこむ顔——そして鼻、その鼻を私はじっと見つめずにはいられなかった。それは幅広く突き出し、まんなかには——なんという巧みな排水設備！——雨樋のようなものがあり、これはのちにじっさいに見たことだが、講義中そこから絶えず雫がしたり落ちるのであった」ハンス・ゲオルグ・ガダマー（中村志朗訳）『ガダマー自伝 哲学修業時代』未来社、1996年、81-82頁。

引用・参考文献

- Ambasciano, Leonardo, *An Unnatural History of Religions-Academia, Post-truth and the Quest for Scientific Knowledge*, Bloomsbury Academic, 2018.
- Biles, Jeremy, “Out of This World: The Materiality of the Beyond,” in Morgan, David (ed.), *Religion and Material Culture - The Matter of Belief*, pp. 135-152, Routledge, 2010.
- Buderer, Hans-Jurgen, *Neue Sachlichkeit: Bilder Auf Der Suche Nach Der Wirklichkeit Figurative Malerei Der Zwanziger Jahre*, Prestel, 1994.
- Freud, Sigm., *Das Unheimliche, Gesammelt Werke in Einzelbänden (Bd. 12), Werke aus den Jahren 1917-1920* S. Fischer Verlag, 1967 (6. Aufl.), S. 227-268（フロイト、ジークムント（藤野寛訳）「不気味なもの」『フロイト全集 17』岩波書店、2006、1-52頁）。
- Otto, Rudolf, *Das Heilige: über das irrationale in der Idee des Göttlichen und sein Verhältnis zum Rationalen*, Beck 1979 (1917).（オットー、ルドルフ（華園聰磨訳）『聖なるもの』創元社、2005年）。
- 生松敬三『二十世紀思想渉猟』青土社、1990年。
- ガダマー、ハンス・ゲオルグ（中村志朗訳）『ガダマー自伝 哲学修業時代』未来社、1996年。
- 澤井義次『ルドルフ・オットー 宗教学の原点』慶應義塾大学出版会、2019年。
- 須藤訓任「解題 書誌事項 「不気味なもの」」『フロイト全集 17』岩波書店、2006年、412頁。
- ハイラー、フリードリヒ（深澤英隆監修、丸山空大、宮嶋俊一訳）『祈り』国書刊行会、2018

ワイマール共和制期における「不気味なもの」の形成

年。

藤原聖子「宗教「学」をめぐる論争の変遷と現在：国際学会のアイデンティティ・ポリシーックス」『東京大学宗教学年報』第40号，pp 1-22，2023年。

藁科智恵『ルドルフ・オットー『聖なるもの』と世紀転換期ドイツ—信仰と近代学問の相克—』晃洋書房，2022年。